校長室だより　11月

2026(令和8)年11月2日
大阪市立天王寺小学校
校長　藤原 和彦

Ｃｈｉｌｄ　ａｂｕｓｅ

今月１１月は、こども家庭庁が、児童虐待について理解を深め、関心を高めてもらうために「オレンジリボン・児童虐待防止推進キャンペーン」を行っています。

児童虐待は長年にわたって増加を続けてきました。令和5年度には、全国の児童相談所による児童虐待対応件数は過去最高の225,509件になりました。令和6年度には、223,691件とわずかに減少したものの、依然として極めて多い状況が続いています。大阪市では、児童相談所にあたるこども相談センターで毎年6,000件以上の対応をしています。また、警察によって摘発された児童虐待事件も令和7年中には2,592件となり、10年前と比較して2倍以上となっています。そして、毎年のように日本のどこかで虐待によって子どもの命が奪われ、ニュースとなっているのはご存じのとおりです。

児童虐待は、4つの種類に分けられます。殴る・ける・叩くなどの暴力をふるう「身体的虐待」、言葉による脅しや無視・きょうだい間での差別的な扱いなどをする「心理的虐待」、性的な行為を伴う「性的虐待」、食事を与えないなど養育を放棄する「ネグレクト」があります。

また、児童相談所が対応する虐待相談の中で最も多いのが「心理的虐待」で、全体の半数近くになっています。一方、警察が摘発した事件の内容では、「身体的虐待」が圧倒的に多くを占めていますが、配偶者間のトラブル対応に警察が駆け付けた際に、「心理的虐待」として児童相談所に通告することも多いそうです。

ところで、なぜ児童虐待は起きてしまうのでしょうか。以前、こども相談センターで虐待を担当している方から教えていただいたのは、子どもが嫌いという理由だけで虐待をするケースというのは、とても少ないということでした。児童虐待のほとんどは、親の置かれた環境やそれに伴うストレス、経済状況を含めた家族の状態、あるいは子どもの育てにくさなど、様々な要因が重なったときに起こってしまうそうです。また、児童虐待は英語で「Child abuse（チャイルド アビューズ）」と言います。abuse は、普通の使い方から離れるという意味で「乱用」や「誤用」と訳されます。ですから、「Child abuse」は文字どおりには「誤った子どもの扱い」となります。このことからも、ほとんどの親は、我が子が憎くて虐待をするのではないという話にうなずくことができます。しかし、暴力を振るう理由を「しつけのつもり」とか「我が子を良い子にしたいから」などと言うのは、言い訳に過ぎませんし、子どもの心を深く傷つけるような叱責も、心理的な虐待につながります。また、改正された児童虐待防止法により、しつけと称して親が体罰することは、法律でも禁止されています。



それでも依然として多くの児童虐待が発生していることから、大阪市立の小学校では、子ども自身が児童虐待について知り、自ら守る力をつけるために、

児童虐待防止啓発 DVD を活用した学習を低学年と高学年のそれぞれで行っています。天王寺小学校でも、今年度から毎年2年生と4年生を対象に実施します。この学習では、アニメ映像の視聴などを通して、困った時には周りの誰かに相談することの大切さを学びます。もちろん、実施の前には教員自身も児童虐待に対する理解を深め、子どもたちをいたずらに不安にさせないよう配慮して取り組む予定です。

最後に、学校は、虐待されている児童を発見した場合、たとえ疑いの段階であってもこども相談センターに通告しなければならない義務があります。それは、何よりも子どもの命を守ることを優先しているからです。万が一にもそうしたことが起こらないためにも、子育てについて何かお困りのことがあれば、どうか遠慮せずに、学校までご相談いただけたらと思っています。

第41回教育奨励賞を受賞しました

昨年度、本校の体育科研究の取り組みに対してスポーツ庁より「全国学校体育研究優良校」の表彰状をいただきました。そして今年度は、第41回時事通信社「教育奨励賞」の「努力賞」をいただきました。この「教育奨励賞」は、創造性に富んだ特色ある教育の実践に顕著な業績を挙げた学校園を表彰し、学校教育の一層の充実を図ることを目的に、文部科学省の後援を得て時事通信社が主催している全国規模の賞です。今年度は、天王寺小学校が大阪市教育委員会の推薦を受けて審査の対象となっていました。

今回評価されたのは、「IT 機器での児童の思考可視化」をテーマにした取り組みです。思考の可視化というと何だか難しそうですが、簡単に言えば、「子どもたちが頭の中で考えていることを、IT 機器を使って見えるようにする」という授業づくりです。学校で使う学習者用端末は、普段調べ学習や発表用のツールとして使うことが多いのですが、本校の学習では、思考する場面でもよく使っています。授業中、子どもたちはいろいろな考えをもっていますが、全員が発表するのには時間が足りませんし、中には発表することがなかなか難しい子もいます。しかし、一人一人の考えを学習者用端末を使って共有することで、友だちの考えを知ったり、自分の考えを深めたりすることができるのです。本校では、そのための道具としても、IT 機器を活用しています。

今回の受賞では、こうした天王寺小学校の授業づくりを外部の方から評価していただいたのですが、学校として何か特別なことをしたわけではありません。日々の授業の中で、子どもたちの学びを少しでもよくしようと工夫されている先生たちの取り組みが評価されたのです。私は、そのことを何よりも嬉しく思っています。



しかし、端末は、あくまでも道具で、最後にものをいうのは、やっぱり「自分はどう考えるのか」です。今回いただいた賞を、ゴールではなく、これからの天王寺小学校の授業づくりの「次の一歩」のきっかけにしていきたいと思います。